

座談より

與謝野晶子

五二

わたしは自分の子供の幼年期には、何よりも健康に注意して來ました。風を引かさないやう、腐敗した食物や、疫痢に感染する危険のある或種の果物を食べないやう、廉價な材料で榮養のある食物を混食させるやう、骨を丈夫にするために石灰分のある物を食べさせるやう、よく含嗽をさせ、顔や手を洗はせるやう、しばしば湯に入らせるやう、厚着や薄着をさせないやう、食べ過ぎないやう、よく日光と外氣に當らせるやう、運動をさせるやう、こんな事に斷えず氣を遣ひました。そんなにしても、小學へ行くやうになりますと、或る兒は水痘を、或る兒は猩紅熱を、それから大抵の兒どもは麻疹を煩ひました。小學で感染して參るのですから、家庭で防ぐことが出來ません。

兒どもは氣の附かないものですから、顔色や様子を見て親が驗溫器を當てさせますと、熱があつて風を引いてゐる事があります。それで常に驗溫器を用意してゐて、早く兒どもの風邪を發見するやうに注意しました。

食物の衛生を細心にしてゐますので、宅の兒どもは中學や女學校を出るまで殆ど腸胃の痛みを知らな

かつたですが、高等學校や大學へ參るやうになつて、外で食べるために腹痛を知るやうになりました。

日當りのよくない市内に住んでゐた頃は、よく風を引く兒がありましたが、郊外へ參つてからは、冬の寒さが厳しい割に却て風を引かなくなりました。空氣は寒くても、よく日光に當るためだと思ひます。

私は兒どもについて健康が第一だと考へてゐますから、衛生には注意しますが、學問の勉強は全く放任にしてゐます。勉強せよとか何を讀めとか申した事がありません。勸めては却て反感を持つたでせうが、放任して置くと、却て自然的にいろいろの書物を讀み、好きな物は自然に自分で勉強致すやうです。

讀むことを親から獎勵しません、両親が常に讀んだり書いたりするのを赤ん坊の時から見てゐるため、でせうか、宅の子供は三歳ぐらゐから何れも讀むことが好きで、お蔭で怠け者が一人も居りません。その自發的な要求に應じるために、幼年の時から、獨りで引出して讀むやうに、いろいろの書物を買つて、兒ども等の目の附く所に備へて置きます。繪本やお伽噺の類は、よく中味を調べて、殺伐なものや、俗惡なもの、野鄙なものは備へないやうにしてゐます。放任的と云つても、間接に是れだけの注意は致してゐます。

また讀んで質問をする兒には、忙しい時でも快く答へてやります。一所になつて讀む時もありますが、親から先きに何を讀めとは申しません。兒どもに自ら進んで讀む發見の喜びを持たさうと思ふため

す。私自身にしても、曾て勝手に倉の中から引出して讀んだ書物が幼な心に嬉しかつたのですから。

この意味で、私は家庭に必ず新古の藏書があつて欲しく、また両親が自身に讀書する習慣があつて欲しいと思ひます。幼い兒どもは、よく大人の眞似をしたがりですから、その性情を自然に伸ばさせたいものです。

私は自分の兒どもを幼稚園に一人も出さなかつたのですが、それは専ら前に述べた衛生のためからでした。併し今日は幼稚園が進歩し、保姆達の注意が行届いてゐますから、幼稚園へ兒どもを出して病氣に感染するやうな恐れが無く、却て健康になるであらうと思つてゐます。

私は幼稚園の事をよく知りませんが、智慧を授けたり勉強させたりする所でなくて、専ら兒どもが快活に、さうして品よく遊ぶ所であつて欲しいと考へます。それが私の望む幼年の兒女の健康を充實させることになるでせう。

幼稚園で土に親んだり、唱歌したり、假名文字や行儀を習つたりするまでは宜しいが、書物を教へるのに類似したことは避けねばなりません。言ひ換へると、學生らしい意識を幼年者に持たせることは宜しくなからうと思ひます。何となれば、教育には兒童の好新性と感激性とを利用することが必要です。幼稚園で早く學生らしい意識を持たせると、小學へ入學した時に、先生と學校教育とに新味を感せず、感激の喜びに心を新しく躍らせる所がありません。兒どもの前には一步一步に新しい祕密の坂があつて、

それを突破する所に創造の喜びがあるのだと思ひます。

學校に早く慣れさせてはいけません。この意味から幼稚園は遊戯場であつて、學校風でないやうにありたいのです。同じ意味から、私はまた小學の中に幼稚園の併置されてゐるのを好みません。

保姆は教師でなくて、私は舊教の尼さんのやうな清淨な、さうして慈愛に満ちた役目をして下さる人々であると思へてゐます。妙齡で、敬虔で、快活で、純情的で、聰明で、親切で、藝術的で、さうして衛生學的であること、是等の條件が揃へば理想的だと思ひます。

新刊紹介

日本一のエバナシ讀本

カタカナオトギとして一、キンタロウ
二、イナバノ白ウサギ、三、ウラシマ
タロウ、四、イツスンボウシ、五、オ
ホエヤマ、六、ラシヨウモン、七、ハ
ゴロモ、八、ウシワカマル、を一冊に
おさめたものと更に一、サルカニカツ
セン、二、シタキリスズメ、三、モモ
タロウ、四、カチカチヤマ、五、コブ
トリ、六、ハナサカザザ、七、ブンブ

クチャガマを一冊におさめたものとあ
ります。幼年教育研究会編で倉橋惣三
教授の責任推奨のものであります。倉
橋教授の推奨の言葉の中に
「子どもの讀みものについては年齢に
よつてそれ／＼違つた問題があるが、
幼稚園乃至小學校初級時代は丁度知的
にも情的にも各自の方向へ芽ばえる時
期にあるだけに特に十分に教育的効果

を考へねばならぬ。殊に幼児の最も親
しむ繪本に於ては大體として刺戟の強
過ぎるもの、感情の纖細に過ぎるも
の、考へ方の複雑過ぎるもの等は俗惡
低級のもの徒らに新奇を衒ふもの、架
空突飛に類するもの等と共に極力排斥
せねばならぬ。」とある。この注意ふか
い選擇のものに編纂せられたこの日本
一のエバナシ讀本は誠に名賞相伴つた
よいエバナシの本であります。

定價金八拾錢文政書院、寶文館が
發賣元であります。(堀生)